

砂浜

風もなくきらめく海原
黒い老人が水中へと消え、また浮かび上がる

心臓が苦しげな息をしている
止まろうかどうかを迷っているらしい

透明なガラスのような意思というものの
脆さの源泉たる生命の蛍光

美しくない風景がのっぺりと寝そべっている
醜さとは違う浅ましさ

冷たい潮風に湿った砂が顔に纏わりつく
官能的な何物もない虚ろさ

失った場所を埋めようとする焦燥——
それをこそ孤独と呼ぶべきであろう

たれこめた薄い霧と灰色の雲の中を
振り子のように左右に舞う鳥が数羽

私にとっての失った場所とは
この掌の皮膚の下にある

ふと湧き上がる慟哭
涙のない慟哭

それでも私は書き続けるだろう
それは自明なことだ

泡を生み出す波の、丸みを帯びたリズム
ぱちぱちとした音の集合体

それらが私の肩を包み込んでゆく
雲の白さとともに

(2013.6.2)